

コロナ禍の重度・重複障害児

神山 寛

2020 年は、新型コロナウイルス感染症が日本中に広まり、三密をさげ、マスク着用、自粛生活の1年だった。

重い障害がある重複障害児（重度・重複障害児）が通う学校も一時臨時休校となり、今までのような卒業式・入学式はできなかった。家庭では、外部からの接触者を断り、家族が重度・重複障害児を抱え大変な生活を送ってきた。5月に入り徐々に登校再開となり、少しずつ学校生活が送れるようになった。しかし、教員等と重度・重複障害児のかかわり方が変わってしまった。

重度・重複障害児は、自らが外界に働きかけコミュニケーション能力を伸ばしていくことが難しい。コミュニケーションの力を発達させるには、「刺激に注意を向ける」→「刺激を予測・期待する」→「大人への積極性・要求表出する」が大事である。そこで、学校においては、重度・重複障害児のコミュニケーション能力を伸ばすため、教員は様々な働きかけを行っている。

しかし、登校が始まった学校では、教員はマスクをし、重度・重複障害児と関わる際には手洗いをするようになった。すぐに、そばに寄ってきて笑いかけたり話しかけたり、また抱き上げたり頬ずりしたりすることが減り、多くの人とのかかわりが難しくなった。特に教員のマスク着用のためコミュニケーションに役立つ顔の情報量が減ってしまっている。口の動きはまったく見えず、表情の変化もつかみづらくなってしまっている。教員の笑った顔でさえ、コミュニケーション能力の未発達な重度・重複障害児にとっては、今までと違って分かりづらい。ある保護者は、子どもがだんだん無表情になっていく、マスクの笑い顔は子どもにとって難解だと言っている。コロナ禍の世の中は、重度・重複障害児にとって生きづらい世の中となっている。早く、新型コロナ感染が終息してほしいものだ。

政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会は、「マスクの着用」「5人以下の会食」等を訴えた。しかし、閣僚、国会議員から市議会議員に至るまで、個人の行動となるとすっかり忘れて、マスクなしの5人以上の会食を行っている。本当に新型コロナ感染症を抑え込もうとしているのか疑問に感じる。

2021年には、新型コロナウイルスに効くワクチン接種が始まる。しかし、果たして重度・重複障害児に副作用がないのだろうか。毎年流行するインフルエンザさえ、保護者は子どもたちのことを考えて、インフルエンザワクチン接種をしないで、守り育てている。

重度・重複障害児が、新型コロナワクチン接種をしないでも大丈夫な世の中、マスクなしで関わる人の表情がしっかりと読み取ることが出る世の中に、早くなってほしいと願うばかりである。